View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies.
Showa Women's University. 2010, Vol.12, 143-157.

論　文

大学生の被養育経験に関する意識の研究
―児童期における母親の具体的な関わりについて―

田中　千穂・三浦　香苗

A study on university students' feelings on how they were brought up, focusing on their mother's involvement during childhood

Chiho TANAKA and Kanae MIURA

This study hypothesized that generational differences have arisen in the subjects' awareness of childcare and childrearing attitudes, and attempted to create a scale for examining such differences.

As a preliminary survey, we asked 124 university students to write freely about the discipline they had received from their mother during infancy, childhood and adolescence, and to describe things they liked and disliked, as well as things they wished their mothers had done. The results showed differences in the number of answers and their distribution according to the time period and the questions posed. We categorized only the specific content of things they liked and disliked during childhood, and studied their distribution.

In the main survey, we provided 246 female university students with a 5-scale evaluation questionnaire on their parents' attitudes to childrearing, as experienced during the student's childhood. The questionnaire was drawn up based on a preliminary survey as well as findings on educational assets. As a result of factor analysis, 4 categories and 18 subscales were determined for "parental and social approaches," and 4 categories and 8 subscales for "a child's abilities and attitudes." Most of the subscales received high scores. However, scores were low for the subscale "diverse activities."

Key words : discipline（しつけ）, generational differences（世代差）, creation of a scale（尺度作成）

問題と目的

筆者の一人は1950年頃に、現在は東京の近郷の住宅地域となっている農村で小学生時代を送った。大都会からの疎開家族もわずかにあったが、部落の全員はお互いに顔見知りで、道で会えば自然に挨拶をしていた。どの家にもガスや水道は引かれておらず、風呂を沸かすのは２・３日おきで、その時には子どもが水を汲み、燃やす薪は家族で作った。祖父母から順番に時間をあけずに入浴することが期待され、自分の都合を言うとその日の風呂には入れなくなった。食事作法はうるさく、好き嫌いなく静かに早く食べることが期待された。放課後は妹の世話や家事の手伝いをすることが期待され、買い物、鶏の世話と戸締まりが彼の担当であった。暇な時間を見つけては近所の同性の友だちと鬼ごっこや三角野球などの集団遊びをよくしていたが、家事手伝いのため家に連れ戻されることもしばしばであった。読書やラジオ聴取などの一人での娯楽は夕方みんなと別れてしか行わなかった。学校でも家でもしつけは厳しく、悪いことをすると食事抜きや暗所への閉じ込めがよく用いられた。お金の持ち出しや年少児への乱暴・いじめなどをした場合には体罰も与えられた。出生順位による兄弟間の扱いの差も大きく、性によって期待されることも大きく異なっていた。運動会や遠足などの学校行事、お節句やお盆などの季節の行事そして近隣のお祭りが楽しみで、その時にだけきれいな服装を着、ごちそうが食べられた。どこの家も貧しく親は自分の食べるものや楽しみを犠牲にして子どもに尽くし、子どもには勉強することが期待され、宿題をやることは非常に大切

とされていた。しかし、彼の同級生の普通高校進学率は、経済的理由から２割にも達していない。働きながら夜間定時制高校を卒業した者も含めてである。

この話から推測できるように、子育てをめぐる状況は第２次世界大戦後大きく変動してきた。現在の大学生の祖父母世代（40 ～ 50歳代の父母の親世代）は、戦前の家族主義の影響を強く受けたしつけを受け、戦後の経済的にも価値的にも大きな変動があった混乱期に青年期を送っている。そして、60年以降の戦後の高度成長期に現在の親世代の子育てを行っている。そこでは、しつけについての考え方や具体的行動には大きな変動があり、大学生の祖父母世代が受けたしつけと行ったしつけ、親世代が受けたしつけと現在の大学生の子ども時代にしたしつけやその基にある育児観とはかなり異なると予想される。

Benesse 教育研究開発センター（2009）の調査には現代の母親の特徴を以下のように記している。母親の出産年齢も学歴も高くなり、子どもにも高学歴を望むようになった。また「しつけの仕方」、「ほめ方・叱り方」などについては悩み、子育てに不安を感じる母親の割合は増加しているものの、子育てを優先し、子どものしつけや教育に関心の高い母親が増加しているという。その一方で仕事を持つ母親は、仕事の負荷と子育ての不安や負担から、子育てを楽しみ自分の活動を充実させるという生活の満足度が下がっているという。

しつけや教育方針といった親の養育態度についての研究は今までに多くなされており、親の養育態度が子どもの情緒発達や心理的安定、対人関係、学校での適応等の問題に影響を与えるという結果が出ている。幾つかの研究では親の意識だけではなく、子ども自身がその親の養育態度をどのように認知しているかを見ることが重要であると指摘している。

酒井･菅原･眞榮城･菅原･北村（2002）は、中学生の親との信頼関係と学校適応の関係についての研究において、親が子にではなく、子が親に抱く信頼感が子どもの学校適応に影響を与えるといい、親子相互信頼群の子どもの学校適応はよくなる傾向にあり、親子相互不信群の子どもは学校に不適応な傾向がみられるといった結果を得ている。西出・夏野（1997）は子どもの認知する家族システム機能と抑うつ感の関係を見て、家族システム機能について子どもがポジティブな評価をしていれば子どもの抑うつ感が減じられること、母親の家族システム機能へのポジティブな評価は子どもの認知を介するとプラスに働き、結びつかない部分は子どもの抑うつ感を増加させることも示唆している。姜・酒井（2006）は、親の養育態度と学校適応の関連についての研究で、親の認知する養育態度よりも子どもの認知する養育態度の方がより有効であると推察し、親のしつけや育て方について子ども自身に尋ねる形で調査を行っているが、親が「よいこと」と思っている養育態度でも、子どもには「よいこと」と認知されないケースが多いことに触れ、親ではなく､子どもが認知する養育態度こそ､子どもの学校での適応に影響を与えていると述べている。

このように、母親の養育態度には、その世代の時代特徴により変化するものがある一方、子どもに対する思いや期待など時代を超えて変化しないものもあるだろう。そこで、筆者らは子どもの認知する親の養育態度は時代によりどう変化してきたか、それが子どもにどう受け止められていたか、そしてその後の子育てにいかに影響を与えているかを明らかにしていきたい。

本報告においては、三世代の女性における養育態度や子育てに関する意識の変化をみる前段階として、現在大学生の子どもが児童期に母親からされたしつけや教育、態度についてどのように認識しているのかについて調査分類を行ない、その傾向について検討を行う。

Ⅰ　予備調査

１．目的

今後の研究を進める上で、現在の大学生が自分たちの受けたしつけについてどのように認知しているか、またどのようなものを記憶しているか、などを検討し、以後の調査研究の基礎資料を得る。

２．方法

１）調査対象　東京都内の私立女子大学生128名。その内訳は、心理学科24名，初等教育学科46名，福祉環境学科58名である。

２）調査時期　2008年10月

３）調査内容　横向きのＢ４版１枚の調査用紙に、以下の順序で提示した。

(1) フェイスシート

「このアンケートは、世代間によって、母親の育児行動の違いがどのように異なるのかを調べるための予備調査として、母親が育児において、しつけとしてどのような言動をしてきたのか、また、子どもがそれに対してどのように感じているのかを調べるための調査です。皆さんの子ども時代を思い起こして、出来るだけ詳しく答えてください」と記載の後、学校名・年齢・性別の記載を求めた。

(2) 自由記述の教示

「あなたの子ども時代にお母さんがしつけとして言った言葉、された行動、しつけなどについて、以下のようにお聞きします。

① お母さんに言われたこと、された態度などでよかったことはどんなことですか？

② お母さんに言われたこと、された態度で嫌だったことはどんなことですか？

③ お母さんの育児における態度、言葉がけなどで、「もっとこうして欲しかったなぁ」と思うのは、どんなことですか？

とたずね、幼児期（幼稚園、保育園児のころ）、児童期（小学一年生～四年生まで）、思春期（小学五年生～中学生）の各時期の①～③について自由な記述を求めた。

３．結果

１）自由記述の集計

①「よかったこと」,②「嫌だったこと」,③「して欲しかったこと」について幼児期、児童期、思春期のそれぞれについて記入した人数の分布について百分率で示したものが**表１**である。自由記述のため、複数の回答も多かったので、４個以上の記入についてはまとめた。無記入と「覚えていない」と記入されたものは区別した。

一般的な回答傾向をみると、どの設問でも「幼児期」の無回答率が多いことがわかる。質問内容別にみてみると、無回答率が最も高いのは「してほしかったこと」で、幼児期75.0%，児童期54.7%，思春期55.5%である。次いで②の「嫌だったこと」で、幼児期48.5%，児童期25.8%，思春期14.8%であり、①の「よかったこと」の率は、幼児期18.8%，児童期16.4%，思春期14.8%とそれほど低くない。

「よかったこと」では、回答率は「思春期」がいちばん高く、「幼児期」が低い。②の「嫌だったこと」でも回答率は「思春期」が高く、「幼児期」に低い。回答数が多かったものも思春期である。③「して欲しかったこと」では、どの時期も無回答が過半数で、その中では思春期の回答率は高い。

幼児期の回答率が低いのは時間の経過により記憶が曖昧であること、思春期の回答率が高いのは、比較的最近であることに加え、発達段階として親との関係を特に意識する多感な時期であるために記憶として鮮明に残っていることなど推察される。そのため、その後の分析は「児童期」に絞ることとした。

２）自由記述の分類

児童期の①「よかったこと」,②「嫌だったこと」の自由記述の回答の内容について、「子どもの成長過程における発達資産」（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター，2006）を参考にして下記のようにカテゴリー化を行なった。使用したカテゴリーは**表２**に示したが、この表は子どもが育っていく上で必要となる環境を社会、家族、地域といった視点から「発達資産」としてまとめられたものである。

発達資産とは「子どもの社会化（社会の一員としての成長）にとって好ましい具体的、常識的な経験及び資質」とされており、子どもの健全な成長に影響を及ぼすとともに、子どもが思いやりを持ち、責任ある大人になるのを支援するものとして捉えている。

さらにＡ～Ｄは「外的資産」、Ｅ～Ｈは「内的資産」と区別されている。外的資産とは「子どもがまわりの世界から受け取る好ましい経験であり、子どもを支援し能力を養成すること、規範を決め期待をかけるなど子どもの生活の構えに関係している。外的資産は家庭、学校、地域社会や団体等が子どもの健全な発達を促進する際に果たすことができる重要な役割」と捉えられており、内

表１　回答数の分布率（%）

回答数	①よかったこと			②嫌だったこと			③してほしかったこと		
	幼児期	児童期	思春期	幼児期	児童期	思春期	幼児期	児童期	思春期
0	18.8	16.4	14.8	48.4	25.8	14.8	75.0	54.7	55.5
1	44.5	43.0	50.0	38.3	51.6	51.8	19.5	35.9	32.8
2	22.7	28.9	28.1	8.6	18.8	26.6	4.7	4.7	10.9
3	12.5	9.4	7.0	3.9	2.3	0.0	0.8	0.0	0.8
4以上	1.6	2.3	0.0	0.8	1.6	7.1	0.0	0.0	0.0
覚えてない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.7	0.0

表２　自由記述の分類基準

	カテゴリー							
	A 容認と支援	**B エンパワーメント**	**C 規範と期待**	**D 多様な活動の場**	**E 好ましい価値観**	**F 好ましい自己確立**	**G 社会的能力**	**H 学習への傾倒**
下位カテゴリー	1 愛情表現	1 子どもの社会的役割	1 家庭の規範	1 創造活動	1 思いやり	1 自己統制力	1 計画性と決断力	1 達成への動機づけ
	2 受容的態度	2 安全･安心な環境	2 大人の規範としての役割	2 家庭外活動	2 社会的正義感	2 自己否定	2 コミュニケーション能力	2 学びへの意欲
	3 理解	3 否定的な態度	3 仲間との交流	3 自然や生命とのふれあい	3 誠実さ	3 人生の目的･自己実現	3 抵抗力	3 宿題や課題への挑戦
	4 承認		4 年齢にふさわしい発達への期待	4 職業との出会い	4 責任感		4 争いの平和的解決	4 読書の喜び
	5 日常生活のサポート			5 消費活動	5 健全な日常生活		5 人権の理解	
	6 地域活動への協力				6 所属感		6 自己情報を管理する力	

的資産は「子どもの好ましい内部成長および発達を反映する特性や行動であり、好ましい価値観や自己確立、社会的能力および学習に関係している。内的資産は子どもが思慮深く好ましい選択を行なうことを助けるとともに、子どもがその人生において自己の内的強さや自身に挑戦するような状況におかれた際の効果的な準備となるもの」として捉えている。

この外的資産と内的資産が相互に影響することによって子どもの発達が促進されるものであり、また、子どもの発達を取り巻く環境としてみた場合、実際には外的資産と内的資産が同時に機能しあうと予測されるので、これらを区別して考えることは困難のように思われたのだが、今回は外的資産と内的資産という視点をそのまま使用してカテゴリー化を行なった。

３）分類別出現率

児童期の①「よかったこと」,②「嫌だったこと」の自由記述の回答について、２）でカテゴリー化したものを基準にコーディングを行なった。コーディングの結果で４名以上が分布しているものについて**表３**に示す。

表３　下位カテゴリー別回答出現数

項目		A						B	C			D		F	H	
回答数		1	2	3	4	5	6	3	1	3	4	2	7	3	1	3
良かったこと	1	16	15	8	14	26	15	1	3	4	0	12	3	4	13	6
	2	3	0	0	1	4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
嫌だったこと	1	0	3	14	18	5	1	23	4	3	10	2	8	0	3	9
	2	0	0	2	4	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

アルファベットおよびその下の数字は、表２のカテゴリーおよび下位カテゴリーのもの

①「よかったこと」で多く挙がったものは「A容認と支援」,「H学習への傾倒」,「D多様な活動の場」,「C規範と期待」,「F好ましい自己確立」であり、「E好ましい価値観」,「G社会的能力」,「Bエンパワーメント」に分類された回答は少なかった。

下位カテゴリーでみると「A-5日常生活のサポート」の回答が最も多く、「A-1愛情表現」、「A-2受容的態度」、「A-6地域活動への協力」、「A-4承認」、「H-1達成への動機づけ」、「D-2家庭外活動」、「F好ましい自己確立」といった順に分布している。

その具体的な内容を見てみると、「A-5日常生活のサポート」には、「身の周りの世話をしてくれた」,「看病してくれた」,「毎日一緒に寝てくれた」等があり、「A-1愛情表現」には、「スキンシップ」,「話を聞いてくれた」,「私の味方だと言ってくれた」等が、「A-2受容的な態度」には、「人格否定はしなかった」「慰めてくれた」「怒る時は目を見てくれた」等がある。「A-5日常生活のサポート」は②「嫌だったこと」についても見られるカテゴリーであるが、「A-1愛情表現」,「A-2受容的な態度」は、①「よかったこと」だけに分布している。

②「嫌だったこと」で挙がったカテゴリーを多い順に示すと「A容認と支援」,「Bエンパワーメント」,「C規範と期待」,「H学習への傾倒」,「D多様な活動の場」であり、「E好ましい価値観」,「F好ましい自己確立」,「G社会的能力」については３名以下の記述であった。

下位カテゴリーを見てみると、「B-3否定的な態度」の回答が最も多く、「A-4承認」,「A-3理解」も多い。「B-3否定的な態度」の内容は「子どもが好きでないことが話に出てきた」,「自分の都合が悪くなるとすぐに怒っていた」,「無視された」,「悪くないのに責められた」等の記述で、基本的に子どもの側には特に問題ではなく親の一方的な言動とみられるものである。「A-4承認」では「他の家の子供と比べること」,「ほめてくれなかった(当然でしょ、というかんじ)」,「『もっとがんばりなさい』といわれた」等であった。「A-3理解」は「話を聞かずに怒られた」,「『何を考えてるかわからない』と言われた」,「出来ないことを否定的に言われた」,「嫌味を言われた」等である。「B-3否定的態度」は②「嫌だったこと」だけであるが、「A-4承認」,「A-3理解」は「よかったこと」にも多く分布している。

「A容認と支援」,「H学習への傾倒」,「D多様な活動の場」,「C規範と期待」などのカテゴリーは①「よかったこと」と②「嫌だったこと」の両方にみられた。例えば、「A-5日常生活のサポート」では、①「よかったこと」では「身の周りの世話をしてくれた」,「『お帰り』と毎日言ってくれた」,「一緒に遊んでくれた」「家に帰ると笑顔で迎えてくれた」等といったもので多く、②「嫌だったこと」としての記述は「着せられる服が好みでなくて嫌だった」,「早く起こしてくれなかった」等というものであったが、その度数は少なかった。「H-3宿題や課題への挑戦」では、①「よかったこと」は「勉強のサポートをしてくれた」,②「嫌だったこと」では「勉強しろと毎日言われた」「塾に行かされた」等などである。「C-1家庭の規範」は、①「よかったこと」では「常識に関してしつけられた」,「やらなきゃいけないことは早くやるように言われた」等、②「嫌だったこと」としては、「門限が厳しかった」,「おとなしくいるようにさせられた」等であった。

「E好ましい価値観」,「F好ましい自己確立」,「G社会的能力」については、①，②ともに記述は少なく、子どもにとってあまり意識されていないということが推測される。

II　本 調 査

１．目的

予備調査で得られた親の養育態度の「よかったこと」「嫌だったこと」についての分類基準をもとに、女子大学生が児童期に経験した親の養育態度について、５段階評定形式の質問紙を作成し、実施する。その結果の分析を通して、現在の大学生世代が経験したと認知している親からのしつけについての特徴を把握する尺度を作成し、今後実施する親子調査の基礎とする。

２．方法

１）質問項目の作成

最終的に採用し、実施した質問項目は、付表１、２に示す158項目である。これらの項目を作成した手順は以下のとおりである。

(1) 分類カテゴリー・下位カテゴリーの確定

予備調査の自由記述の分類の際に用いた「子

どもの成長過程における発達資産」（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター，2006）の分類基準の検討を通して、より日本の実態に即した分類カテゴリーと下位カテゴリーを作成した。これらは**付表**に記載されている。

(2) 具体的項目の検討

予備調査で挙がった肯定的・否定的表現の項目を上記下位カテゴリーに当てはめていった。そして重複あるいは類似した表現の項目はできるだけ削除すると同時に、(1) で作成した各カテゴリー・下位カテゴリーに当てはまる項目ができるだけ偏らなく入るようにした。また、各下位カテゴリーには、できるだけ複数の項目が入るようにした。

2）調査対象　東京都内私立女子大学生246名。心理学科104名，初等教育学科78名，福祉環境学科12名，現代社会学科１名，その他30名，無記入21名で、１年生31名，２年生150名，３年生29名，４年生14名，無記入22名である。兄弟構成についての情報によると、子ども数（自分自身を含め）は１人22名，２人150名，３人57名，４人７名，５人２名であり、生まれ順では１番目132名，２番目83名，３番目18名，４番目４名，５番目２名であった。

3）調査時期　2009年10月

4）具体的調査内容　横向きのＢ４版１枚の調査用紙に以下の内容を示した順序で提示した。

(1) フェイスシート

「この調査は、あなた方のお母さん方が子どもの頃受けたしつけとお母さん方があなた方にしたしつけとはどのようなものは同じで、どこは違ってきたかを見るための、つまり、昔と今では、家庭でのしつけがどのように変わってきたかを見るための基礎資料を得るためのものです。そこで、あなたが小学校低学年の頃に（小学校１年生から３年生まで）どのようなしつけや育てられ方をされていたかを教えてください。」と記載の後、学科、学年、きょうだいは何人中の何番目か、兄弟構成の男女の数についての記載を求めた。

(2) 質問項目の提示

上記の１）の質問項目の作成作業で確定した具体的内容と提示順序については**付表**に示す。回答は５段階評定（あてはまる・よくされていた、ややあてはまる・時々されていた、どちらともいえない、あまりあてはまらない・あまりされていない、全然あてはまらない・全然されていない）で求め、兄弟等の家庭環境によってあてはまらないものについては「該当しない」という欄に印をつけさせた。

３．結果

1）データ分析の方針

付表に具体的質問項目とその単純集計結果および因子分析の結果を示した。幾つかの項目には、非該当が多くみられた。「男のきょうだいと比較された」や「妹（弟）の世話をするとほめられた」など「きょうだいの存在」に関することと「ペットの飼育」に関するものであった。非該当と回答した者が10%（25名）を超える項目は因子分析などのその後の分析の対象からは外した。

また、一般的に肯定的な回答が多く、５段階評定の４を超えるものが多くみられた。天井効果の影響を考慮しつつも、しつけの特徴を見るには意味のあると思われる項目はできるだけ多く残しておきたいということを考慮し、平均値 +1/2標準偏差が５を超える項目も分析の対象から外した。

また、それ以降の因子分析による項目選択は、カテゴリーごとに主因子解・プロマックス法の因子分析を行うこととした。試みに外的資産・内的資産という大枠で分析を試みたが、20を超える因子が抽出され、それでも多数の項目が排除されたために、下位カテゴリーに応じた項目の選択という本来の調査実施の趣旨によって、カテゴリーごとの因子分析を採用することとした。因子数の解の選択は、想定した下位カテゴリーに沿った因子が抽出されていること、単純構造となっていることを共通の根拠とした。項目採用の基準は当該因子に .35以上の因子負量があり他の因子には .30以下しか負荷されていないこととした。付表の因子分析結果の欄に数値が表示されている項目は、その下位尺度として採用されたものであることを示し、また、各カテゴリーで採用された下位尺度の平均値と標準偏差およびα係数も示した。以下に分析結果を示す。

2）外的資産に関する尺度

A.　容認と支援　固有値１以上の基準の主因子解では７因子が抽出され、全分散の65.6%が説明されていた。採用した５因子解では、55.3%を説明している。第１因子（FA1）は、想定した｛愛情

と承認｝と｛ふれあいの時間の確保｝という下位カテゴリーの項目から構成されている。７項目からなる因子尺度は『受容』と命名した。α係数は.84である。（α係数は付表に記されているので以後は省略する）。第２因子（FA2）は、「話す・話せた」に関する３項目からなり、『会話』と命名する。第３因子（FA3）は、「行事をする・一緒に行動する」にかかわる４項目からなり、『ともに行動』と命名する。第４因子（FA4）は、｛望ましい習慣の形成｝として作成した３項目からなり、『習慣形成』とした。第５因子（FA5）は、「食事を作った・洗濯物を片づけた」という２項目からなり、『性役割』と命名した。

B.　役割　固有値１以上の基準の主因子解では４因子が抽出され、全分散の59.6％が説明されていた。採用した３因子解では、51.5％を説明している。第１因子（FB1）は、想定した｛地域活動への参加｝の３項目からなり、『地域活動』と命名した。第２因子（FB2）は｛役割分担｝の４項目からなり、『役割分担』と命名した。第３因子（FB3）は、｛他の家族の子どもとの交流｝の中の友だちとの交流の２項目からなり、『友だちとの交流』と命名した。

C.　規範と期待　固有値１以上の基準の主因子解では９因子が抽出され、全分散の51.9％が説明されていた。採用した６因子解では、全分散の45.4％を説明している。第１因子（FC1）は８個から構成され、それらは｛家庭外の規範｝４項目、｛子供の見本｝２項目などからなり、『モデルの意識化』とした。第２因子（FC2）の６項目は、｛他家族との接触｝と｛仲間との交流｝からなり、『友だちとの交流』と命名した。第３因子（FC3）の７項目は、幾つかの下位カテゴリーに分散しており、安心・安全を求めていると予想されたので、『慎重な行動』と命名する。第４因子（FC4）は、「笑顔」「明るいふるまい」「挨拶」の項目からなり、『明るい態度』と命名した。第５因子（FC5）は、「小学生だから」「自分の部屋の整理整頓」「靴を揃える」「持ち物の管理」からなり、『整理・整頓』と命名した。第６因子（FC6）は、「他人の嫌がることをしない」「迷惑をかけない」「友だちを大切にする」からなるので、『向社会性』とした。α係数は、第２因子の.78から第６因子の.59までに分布している。

D.　多様な活動の場　固有値１以上の基準の主因子解では７因子が抽出され、全分散の60.9％が説明されていた。採用した４因子解では、全分散の37.6％を説明している。第１因子（FD1）は、両親、祖父、おじなどの仕事の話と親の職場に行った項目などの５項目からなり、『職業との出会い』と命名した。第２因子（FD2）は、「図書館や博物館に連れて行ってくれた」「名所などに連れて行ってくれた」「水泳やバレーのお稽古に通わせてくれた」の３項目からなり、『文化との出合い』と命名した。第３因子（FD3）は「子供会などの活動には参加するように言われた」「夏休みにラジオ体操には参加するように言われた」「好き嫌いをしないように言われた」の３項目に因子負荷量が高く、採用はされなかったがそれ以外の相対的に因子負荷量の高い項目の内容を考慮して、『地域活動への関与』と命名した。

３）内的資産に関する尺度

E.　望ましい価値観　固有値１以上の基準の主因子解では２因子が抽出され、全分散の47.8％が説明されていて、それを採用した。「第１因子（FE1）には、｛社会的正義｝と｛誠実さ｝などの７項目の因子負荷量が高く、『良き品行』と命名する。第２因子（FE2）は、｛思いやり｝や｛自然とのふれあい｝の項目を中心に５項目が属し、『慈悲』と命名した。

F.　望ましい自己確立　固有値１以上の基準の主因子解では２因子が抽出され、全分散の50.2％が説明されていて、それを採用した。第１因子（FF1）には「つらくても我慢するようにいわれた」や「お前はだめだといわれた」からなり、『忍耐』と命名した。第２因子（FF2）は、「一度やるといったことはきちんとやるように言われた」や「一度決めたことは貫きとおすように言われた」などからなり、『完遂』と命名した。

G.　社会的能力　固有値１以上の基準の主因子解では２因子が抽出され、全分散の49.4％が説明されていて、それを採用した。第１因子（FG1）は、｛コミュニケーション能力｝の多くの項目と「はっきり言うように」や「いい加減なことは言わない」からなり、『明確な意思表示』と命名した。第２因子（FG2）は「友だちの悪口は言わないように言われた」と「暴力を使わないように言われた」からなり、『良好なコミュニケーション』と命名した。

H.　学習への傾倒　固有値１以上の基準の主因子

解では５因子が抽出され、全分散の67.7％が説明されていたが、２因子解を採用した。全分散の40.1％を説明している。第１因子（FH1）は、「勉強が嫌であった」「勉強の話をされるのが嫌であった」に高く負荷し、「勉強に熱中する方であった」にマイナスの負荷があった。そこで、得点を逆転させ、『学習への熱中』とした。第２因子（FH2）は、勉強をしたり、成績が上がると親が喜んだという２項目からなり、『親の学習への期待』と命名した。

４）各尺度・下位因子尺度に関する結果

付表に示した外的・内的資産の各尺度の平均値と標準偏差および分散分析結果を示したものが**表４**である。また、外的尺度の下位尺度別の平均値と標準偏差および検定結果を示したものが**表５**である。内的尺度の平均値と標準偏差および平均値の差の検定結果を**表６**に示す。

平均値の差の検討は、原則として個人内分散分析を実施し、有意な差が見られた場合には、Bonrroni の多重比較を行い、２群のみの場合には対応のある平均値の差の検定を行った。

外的資産に関する結果

外的資産の４尺度（下位尺度で採用した項目の全体平均）に関しては、分散分析の結果 .01％水準で有意で、A の《容認と支援》の尺度平均が4.12と高く、B の《役割》と C の《規範と期待》がそれに続き、D の《多様な活動の場》が3.50と最も低い。

A の《容認と支援》の分散分析の結果も .01水準で有意で、多重比較の結果、FA4 の『習慣形成』と FA2 の『会話』が高く、FA3 の『ともに行動』、FA1 の『受容』、FA5『性役割』の順に値が低くなる。B の《役割》の分散分析の結果も .01水準で有意で、FB3 の『友だちとの交流』が高く、

表４　外的資産・内的資産尺度の結果

		平均　(SD)	F 値	多重比較
外的	TA	4.12　(.54)	F(3,486) =82.79 p<.01	TA>TB・TC>TD
	TB	3.71　(.65)		
	TC	3.66　(.46)		
	TD	3.50　(.66)		
内的	TE	3.89　(.63)	F(3,639) =47.61 p<.01	TE>TF・TG・TH
	TF	3.39　(.70)		
	TG	3.40　(.72)		
	TH	3.32　(.71)		

表５　外的資産下位尺度の結果

		平均　(SD)	α	F 値	多重比較
FA	1	4.00　(.77)	.84	F(4,912) =37.38 p<.01	FA4・FA2・FA3 >FA1>FA5
	2	4.24　(.83)	.74		
	3	4.21　(.69)	.57		
	4	4.38　(.62)	.47		
	5	3.71　(1.03)	.87		
	TA	4.12　(.54)			
FB	1	3.94　(1.02)	.80	F(2,432) =116.09 p<.01	FB3>FB1>FB2
	2	3.26　(.84)	.67		
	3	4.27　(.78)	.52		
	TB	3.71　(.65)			
FC	1	2.35　(.73)	.74	F(5,1010) =211.76 p<.01	FC3・FC5・FC2・FC6 >FC4>FC1
	2	3.93　(.77)	.78		
	3	4.15　(.59)	.68		
	4	3.33　(1.04)	.73		
	5	4.09　(.67)	.59		
	6	3.88　(.82)	.59		
	TC	3.66　(.46)			
FD	1	3.10　(.96)	.77	F(2,382) =76.88 p<.01	FD2>FD3>FD1
	2	4.10　(.83)	.50		
	3	3.75　(.92)	.50		
	TD	3.60　(.66)			

表６　内的資産下位尺度の結果

		平均　(SD)	α	t 検定値	尺度差
FE	1	4.21　(.62)	.79	t(227) =17.31 p<.01	FE1>FE2
	2	3.45　(.82)	.66		
	TE	3.89　(.63)			
FF	1	3.08　(.94)	.61	t(228) =7.74 p<.01	FF2>FF1
	2	3.68　(.88)	.64		
	TF	3.39　(.70)			
FG	1	3.27　(.81)	.73	t(230) =6.56 p<.01	FG2>FG1
	2	3.71　(.93)	.50		
	TG	3.40　(.72)			
FH	1	2.86　(1.01)	.72	t(231) =15.65 p<.01	FH2>FH1
	2	4.22　(.80)	.71		
	TH	3.32　(.71)			

FB2の『役割分担』の値が低い。Cの《規範と期待》の分散分析の結果も有意で、FC3の『慎重な行動』の値が高く、FC1の『モデルの意識化』の値は全下位尺度の中でも最も低い2.35であった。Dの《多様な活動の場》は、尺度の平均値が低いが、尺度内分散分析の結果は有意であり、相対的に最も高いのはFD2の『文化との出合い』であり、低いのはFD1の『職業との出会い』であった。

内的資産に関する結果

内的資産の４尺度の分散分析の結果、.01水準で有意であり、Eの《望ましい価値観》の値が他の３尺度のものよりも高く、他の３尺度間には差は見られない。

各尺度の中の２下位尺度間では、平均値の差の検定でいずれも有意な差が見られた。内的資産の下位尺度の中で相対的に最も高いのは、FH2の『親の学習への期待』とFE1の『良き品行』であり、低いものはFH1の『学習への熱中』であった。

まとめと討論

１．予備調査の結果

大学生を対象とした親からされた言動で①「よかったこと」②「嫌だったこと」③「して欲しかったこと」についての自由記述についてカテゴリー分けを行い、その分布をみた。その結果、どの時期でも①「よかったこと」についての回答率が「嫌だったこと」や「してほしかった」よりも高かった。これは調査対象者がしつけについて肯定的にみていることを示すものであり、肯定的な人間関係が成立していたためであると思われるが、一般に自分の過去に対してポジティブに考える人間の性向の表れともみなすことができよう。

時期別に見ると上記①から③のいずれの設問でも幼児期に無回答であることが多く、思春期に最も多く回答が得られた。これは、幼児期は時間の経過で記憶が薄いこと、記憶が断片的であり、かつその後の親子関係などが影響しエピソードとしてはイメージが変容してしまっているものもあるのではないかと推測される。また、思春期の記述にはその内容が客観的ではなく、思春期特有の親子関係が反映されているものが多くあるようにも見受けられた。

児童期の①「よかったこと」，②「嫌だったこと」の自由記述について、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（2006）の「教育資産」の考えに基づいてカテゴリー化を行ったところ、①「よかったこと」，②「嫌だったこと」に共通して「A容認と支援」カテゴリーに多くの記述が分類された。また、下位カテゴリーで多くの分布があったものは、「A-3理解」，「A-4承認」，「A-5日常生活のサポート」，「C-1家庭の規範」，「H-3宿題や課題への挑戦」などであった。特に、「A-3理解」，「A-4承認」では人数の分布が多く、肯定的な記述も否定的な記述も多かった。これは、これらのカテゴリーに関することが、子どもが親の関わりについて意識する要素であることであること、また、現在の親が子どもとの関わりについて重要視している要素であるためと考えられる。さらに、現在の子どもが「理解してもらうこと」、「承認されること」に関心を持っている事を示唆する。

２．本調査の結果

予備調査および国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（2006）の「教育資産」の考えに基づいて、外的資産に係わる４カテゴリー・内的資産に係わる４カテゴリーを具体化した158項目の５段階評定の質問紙を246名の大学生に実施した。天井効果が見られた項目あるいは非該当数の多かった項目を外して、カテゴリーごとに因子分析を行った。

その結果、外的資産の、Aの《容認と支援》に関しては５下位尺度、Bの《役割》に関しては３下位尺度、Cの《規範と期待》に関しては６下位尺度、Dの《多様な活動の場》に関しては３下位尺度が抽出された。内的資産の、Eの《望ましい価値観》・Fの《望ましい自己確立》・Gの《社会的能力》・Hの《学習への傾倒》に関しては、いずれも２下位尺度が抽出された。外的資産の尺度のうちで行われていたという評定値の高いものは、Aの《容認と支援》で、低いものはDの《多様な活動の場》であった。内的資産の尺度ではEの《望ましい価値観》の尺度の評定値が他の３尺度よりも高かった。

全下位尺度26のうち、4.2以上と高い評定値の下位尺度は、FA2の『会話』、FA4の『習慣形成』、FE1の『良き品行』、FH2の『親の学習への期待』の４下位尺度、逆に3.0以下の低い評定の下位尺度はFC1の『モデルの意識化』とFH1の『学習への熱中』の２つであった。

これらの結果は、調査対象者となった現代の大

学生が受けたしつけの特徴を表しているものと思われる。つまり、現在のしつけは子どもの受容・容認とそれに基づく支援を中心に行われ、社会的に望ましい行動の養成が関心事であり、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（2006）の指摘するように、社会的に活動の場を広げ、広い関心を持たせることは重視されていない。子ども、特に女子に期待する特性としては、慎重な行動・習慣の形成・役割分担・明るい態度であり、親の強い関心にも関わらず、学力の向上はそれほど重視されていない。

このデータはある私立大学の女子学生の結果のみであり、この結果がどの程度今の日本の大学生に一般化可能であるかは疑問である。また、これらの結果は女子学生から得たものであり、彼女らの保護者が実際にどのようなことを期待し、また、実行したものを直接にみたものではない。しかしながら、従来の信頼や受容以外の、しつけの多様な側面について分析していく尺度項目は確定できたと考える。今後は項目の精選を通して尺度の安定化を求め、最終的には女子大学生とその母親、祖母を対象として調査を行い、しつけの時代的変遷に係わる意識調査を実施していきたい。

引用文献

Benesse 教育研究開発センター（2009）．第３回子育て生活基本調査(幼児版)　Benesse 教育研究開発センター

姜信善・酒井えりか（2006）．子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連についての研究　富山大学人間発達科学部紀要，１，pp.111-119

国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（2006）．子どもの成長過程における発達資産についての調査研究報告書　国立教育政策研究所社会教育実践研究センター

西出隆紀・夏野良司（1997）．家族システムの機能状態の認知は子どもの抑うつ感にどのような影響を与えるのか　教育心理学研究，45，pp.456-463

酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原信介・北村俊則（2002）．中学生の親および親友との信頼関係と学校適応　教育心理学研究，50，pp.12-22

（たなか　ちほ　武蔵大学学生相談室）
（みうら　かなえ　昭和女子大学心理学科）

付表１　外的資産に関する質問項目とその結果

上位カテゴリー	下位カテゴリー	提示順序	具体的項目	平均	(SD)	非該当数	因子 1	2	3	4	5	6
A容認と支援	愛情と承認	57	スキンシップをしてくれた	4.18	(1.01)	2	.67					
		145	ひざに座らせてくれたり、ぎゅっと抱きしめてくれた	3.77	(1.36)	5	.68					
		11	一人で留守番させないように気をつけてくれた	3.52	(1.33)	7			.35			
		25	元気がない時にはなぐさめてくれた	4.14	(1.03)	2	.52					
		95	好きなことから始めてもいいと言われた	3.06	(1.17)	6						
		120	家では何でも思ったことを話せた	3.86	(1.18)	5		.43				
		123	無視された	1.69	(1.11)	20						
		143	私のことを第一に考えてくれた	4.09	(1.00)	4	.71					
		152	家は一番ほっとするところであった	4.28	(0.98)	2						
	日常生活のサポート	1	一緒に遊んでくれた	4.07	(1.01)	2						
		7	お正月やクリスマスの行事は行った	4.71	(0.70)	0	–	–	–	–	–	
		40	豆まきや七夕などの行事をしてくれた	4.46	(0.93)	2			.82			
		41	お買い物に連れて行ってくれた	4.79	(0.49)	1	–	–	–	–	–	
		86	お雛様を飾ってくれた	4.59	(0.95)	5	–	–	–	–	–	
		158	病気の時には看病してくれた	4.83	(0.52)	2	–	–	–	–	–	
	保護者の地域活動への協力	6	運動会などの学校の行事には来てくれた	4.8	(0.56)	2	–	–	–	–	–	
		39	授業参観には来てくれた	4.72	(0.66)	1	–	–	–	–	–	
	ふれあいの時間の確保	34	方々に一緒に出かけた	4.47	(0.85)	1			.53			
		44	学校で起こったことなどをよく話した	4.51	(0.79)	2		.96				
		59	食事中に学校で起こったことなどを良く話した	4.35	(1.00)	2		.76				
		77	みんな忙しいので食事は別々であった	1.84	(1.17)	12						
		78	私のわがままに付き合ってくれた	3.61	(1.08)	5	.77					
		79	一緒に眠ってくれた	3.94	(1.19)	3	.61					
		80	一緒にいる時間を多くとってくれた	4.10	(1.03)	2	040					
		89	食事を一緒に作った	3.69	(1.16)	4					.66	
	望ましい習慣の形成	35	食事中のマナーを注意された	4.41	(0.83)	1				.62		
		71	しなくてはならないことは早くするように言われた	4.20	(1.01)	1				.38		
		147	人に会ったら挨拶をするように言われた	4.53	(0.83)	2				.36		
	家族としてのまとまり	56	家族のお誕生会をした	4.41	(0.98)	1			.42			
		64	食事は一緒にとった	4.68	(0.69)	1	–	–	–	–	–	
	兄弟との関係	4	きょうだいを対等に扱ってくれた	3.66	(1.13)	29	–	–	–	–	–	
		37	きょうだいで比較された	2.83	(1.35)	34	–	–	–	–	–	
		46	きょうだいでえこひいきがあった	2.29	(1.24)	34	–	–	–	–	–	
		82	男のきょうだいとは扱いが違った	2.82	(1.36)	111	–	–	–	–	–	
		87	洗濯物を干したり片付けたりした	3.72	(1.22)	4	–	–	–	–	.64	

B役割	家事への参加	8	食事の準備や後片付けが期待された	3.57	(1.23)	1		0.58				
	役割分担	12	ペットの世話など家では自分の仕事があった	3.14	(1.27)	32						
		13	外で人にあったら挨拶するように言われた	4.29	(1.01)	1						
		52	配膳や後片付けなどの仕事が割り当てられていた	3.09	(1.33)	8		.71				
		92	皆で出かけるときには、自分がすることが決まっていた	2.53	(1.11)	8		.47				
		100	食事のときの席は決まっていた	4.47	(1.04)	6						
		148	自分の分担の役割はきちんとするように言われた	3.74	(1.10)	4		.66				
	他の家族の子どもとの交流	38	お正月などには祖父母の家にいった	4.5	(1.05)	4	–	–	–			
		48	祖父母が家に泊まりにきた	3.26	(1.49)	15						
		60	友達が家に来ると丁寧に応対してくれた	4.62	(0.64)	3			.60			
		83	他の家族と旅行などに行った	3.16	(1.61)	24	–	–	–			
		84	いとこなどとよく遊んだ	3.87	(1.37)	15						
		97	友だちを家に連れてくると歓迎された	3.93	(1.17)	3			.85			
	地域活動への参加	49	地域の子供会活動には参加してくれた	3.68	(1.33)	13	.55					
		50	地域の運動会やお祭りには一緒に行った	4.08	(1.10)	3	.99					
		85	地域のお祭りには一緒に参加した	4.02	(1.20)	5	.75	**.67**	**.52**			

C規範と期待	家庭の規範	2	翌日の準備は前日にすることを教えられた	4.30	(0.97)	0			.50			
		43	うそをつかないように言われた	4.18	(0.92)	2						
		51	挨拶など目上の人への行動には失礼がないように注意された	4.05	(0.99)	2			.49			
		66	朝起きたときや寝る前の挨拶をするようにされた	3.72	(1.31)	3				.59		
		69	家をでる時や帰ってきたときは挨拶した	4.57	(0.85)	1	–	–	–	–	–	–
		70	靴の脱ぎ方が悪いとしかられた	3.86	(1.23)	2			.41			
		75	家族でも年上の人には、丁寧な言葉を使うように注意された	2.62	(1.39)	6						
		88	自分の部屋の掃除を自分で行った	3.35	(1.26)	14					.43	
		93	風呂に入る順序は決まっていた	2.12	(1.35)	8	.38					
		99	自分の使っている部屋を整理整頓するように言われた	4.51	(0.82)	8						
		103	自分の持ち物の管理などに責任を持たされた	4.04	(0.99)	4					.50	
		128	観ていいTVの番組が決まっていた	2.66	(1.47)	11						
		154	家では靴を揃えるように言われた	4.40	(0.94)	2					.44	
	子どもの見本	14	親を見習うように言われた	2.41	(1.04)	2	.41					
		106	「親のおかげで今生活できているのよ」といわれた	2.53	(1.46)	8	.59					
	仲間との交流	10	近くの友だちと一緒に遊ぶように期待された	3.33	(1.13)	2		.40				
		15	友達とよく遊ばせてくれ	4.24	(0.98)	1		.63				
		102	友達の家によく行った	4.23	(1.12)	2		.66				
		119	友だちを大切にするように言われた	4.30	(0.94)	3						.44
		124	自分では気がつかない友だちのいいところを話してくれた	2.73	(1.29)	5						
	年齢にふさわしい発達への期待	5	妹（弟）の世話をするとほめられた	3.69	(1.08)	111	–	–	–	–	–	–
		16	小学生になったら、してもいいことができた	3.54	(1.11)	4						
		22	年少の子どもに親切にするように言われた	3.61	(1.21)	1			0.41			
		63	もう小学生だからとよく言われた	2.65	(1.19)	2	0.49					
		110	自分で学校の準備をするようにさせられた	4.51	(0.82)	3					0.64	
	他家族との接触	3	友だちの家族と行き来があった	3.84	(1.22)	2		.81				
		36	友だちのお母さんと母親は連絡しあっていた	4.17	(1.01)	4		.54				
		81	友だちの誕生会によく呼ばれた	3.60	(1.35)	5		.58				
	家庭外の規範	53	人に自分や家庭の自慢しないようにいわれた	2.30	(1.19)	14	.41					
		72	いつも笑顔でいるように言われた	2.93	(1.27)	7				.75		
		74	元気で明るく振舞うようにいわれた	3.30	(1.27)	6				.84		
		76	他の人に嫌われるようなことはしないようにいわれた	3.35	(1.29)	4						.58
		94	約束の時間を守るように言われた	4.23	(0.97)	3			.53			
		101	他の人と話すときは丁寧な言葉を使うように注意された	3.83	(1.10)	3						
		107	友達の見本になるようにいわれた	1.96	(1.08)	8	.71					
		111	皆からほめられるような人になるように言われた	2.52	(1.20)	7	.59					
		113	人に自慢できるものを持ちなさいといわれた	2.34	(1.21)	10	.57					
		156	他人に迷惑をかけるなと言われた	3.98	(1.06)	3						.49
	安全の確保	42	道を渡るときには、注意するように言われ	4.61	(0.71)	1						
		47	家を出るときには、車に気をつけるようにといわれた	4.42	(0.81)	4			.47			
		91	家に帰るのが遅れそうなときには、連絡するように言われた	4.56	(0.87)	5	–	–	–	–	–	–
		98	知らない人には注意するように言われた	4.49	(0.83)	2			043			
		65	道草をしないように注意された	3.04	(1.28)	4						

D多様な活動の場	お稽古	17	ピアノやバイオリンなどの音楽を習わせてくれた	4.38	(1.23)	11	–	–	–			
		125	水泳やバレーなどのお稽古に通わせてくれた	4.35	(1.15)	12		.41				
		130	学習塾に通わせてくれた	3.71	(1.65)	17						
	家庭外活動	9	子ども会などの活動には参加するように言われた	3.44	(1.24)	5			.70			
	職業との出会い	19	親の職場に連れて行ってもらったことがある	3.25	(1.64)	15	.43					
		62	お父さんやお母さんの仕事についてよく話を聞いた	3.18	(1.33)	4	.81					
		108	おじいさんから仕事について話を聞いた	2.64	(1.51)	16	.62					
		116	親が一生懸命働いていることを話してくれた	3.08	(1.36)	6	.65					
		117	将来どんな仕事につきたいか聞かれた	3.73	(1.21)	5	.51					
		104	おじさんやおばさんの仕事について話してもらった	2.74	(1.39)	8	.58					
		131	将来の夢について、家族で話したことがある	3.53	(1.37)	5	.46					
	消費活動	20	ほしいものも簡単には買ってくれなかった	3.49	(1.14)	2						
		109	自分の貯金通帳を持っていた	3.03	(1.67)	14						
		135	お小遣いを計画的に使うようにいわれた	3.43	(1.41)	17						
	健康活動	21	朝晩歯磨きをさせられた	4.40	(0.94)	1						
		90	夏休みにラジオ体操には参加するようにいわれた	3.73	(1.54)	17			.39			
		115	おやつや飲み物の取り方に注意された	3.10	(1.29)	7						
		132	好き嫌いをしないように言われた	4.09	(1.09)	3			0.40			
		138	食事は1日3回きちんと食べた	4.73	(0.74)	3	–	–	–			
		140	夜早く眠るように言われた	4.49	(0.83)	3						
	社会見学	105	図書館や博物館などに連れて行ってくれた	3.60	(1.37)	5		.58				
		127	名所などに連れて行ってくれた	4.32	(1.00)	5		.43				

付表２　内的資産に関する質問項目とその結果

分類水準		提示順序番号	具体的項目	平均	(SD)	非該当数	1	2
E望ましい価値観	思いやり	24	お年寄りや障がい者に親切にするように言われた	3.87	(1.12)	2		.54
		73	物を大切に使うように言われた	4.29	(0.88)	1	.60	
		136	貧しい国の子どもの話などを聞かされた	4.29	(0.88)	7		.65
		139	感謝の気持ちを持つようにいわれた	4.28	(0.95)	4	.41	
	社会的正義感	23	やりたいといったことは最後までやりなさいと言われた	3.59	(1.20)	1	.36	
		114	悪いことをしたときには、厳しく叱られた	4.49	(0.82)	3	.76	
		133	約束は守るように注意された	4.41	(0.82)	4	.72	
	自然とのふれあい	129	花壇に草花を植えた	3.57	(1.41)	9		.43
		141	ペットを飼っていた	3.54	(1.67)	42	−	−
	誠実さ	61	自分の言動に責任を持つように言われた	3.80	(1.11)	1		.50
		149	間違ったときには謝るようにしつけられた	4.42	(0.82)	2	.71	
		150	仲直りをした後はそれをこだわらないように言われた	3.25	(1.32)	8		.52
	責任感	29	自分でできることは自分でするように言われた	3.97	(0.97)	3	.40	
			平均	3.52	(0.67)	α	**.79**	**.66**
F望ましい自己確立	自己統制力	28	「泣いたら負け」といわれた	1.92	(1.14)	15		
		58	一度決めたことは貫き通すように言われた	3.37	(1.19)	2		.70
		137	「それはクリスマスプレゼントね」などといわれて待たされた	3.14	(1.45)	9		
		142	少しくらいつらくても我慢するようにいわれた	3.60	(1.13)	3	.74	
		153	一度やるといったことはきちんとやるようにいわれた	3.89	(1.08)	3		.73
		159	つらくても我慢するように言われた	3.05	(1.21)	5	.85	
	自己肯定	26	「私の味方だよ」と言ってくれた	3.75	(1.23)	7		.55
		122	「お前は～が駄目だ（下手だ）」といわれた	2.61	(1.42)	10	.36	
			平均	3.39	(0.70)	α	**.61**	**.64**
G社会的能力	コミュニケーション能力	27	「自分から話すように」と言われた	2.96	(1.13)	5	.37	
		45	どんなふうに考えているのかを聞かれた	3.45	(1.12)	3	.58	
		118	言いたい事は言うように言われた	3.43	(1.17)	5	.82	
	争いの平和的解決	18	けんか両成敗といわれた	2.93	(1.28)	21		
		30	暴力は使わないように言われた	3.87	(1.13)	5		.37
		146	不愉快なことやいやなことははっきり言うように言われた	3.34	(1.13)	5	.73	
	自己情報を管理する力	68	友だちの悪口は言わないように言われた	3.53	(1.18)	3		.81
		121	いい加減なことは言わないようにいわれた	3.15	(1.22)	4	.39	
			平均	3.40	(0.72)	α	**.73**	**.50**
H学習への傾倒	達成への動機づけ	31	「勉強すると色々なことがわかって面白いよ」といわれた	3.13	(1.32)	6		
		33	熱心に勉強していると親は嬉しそうであった	3.99	(1.01)	4		.80
		96	成績が上がると親は喜んでくれた	4.44	(0.83)	4		.70
	学びへの意欲	112	勉強がいやであった	3.14	(1.28)	5	.81	
		144	勉強の話をされるのがいやであった	3.29	(1.34)	6	.71	
		160	勉強に熱中するほうであった	2.98	(1.20)	5	−.52	
	宿題や課題への挑戦	55	学校の宿題はいつもやっていった	4.16	(1.09)	1		
		134	宿題を手伝ってもらった	3.46	(1.31)	6		
		157	マンガなどは勉強が終わってから見るように決められていた	3.05	(1.43)	7		
		151	宿題は易しそうなものをやった	2.80	(1.16)	5		
	読書の喜び	54	家の人はよく本を読んでいた	3.44	(1.35)	2		